

第17回「東書教育賞」の審査を終えて

東書教育賞審査委員会

〔A部門〕

第17回「東書教育賞」を受賞された先生方に、心からお祝いを申し上げます。

この「東書教育賞」は、東京書籍の創業75周年を記念して創設されましたもので、昭和60年1月に第1回の公募がなされました。その後この賞についての先生方の関心も年ごとに高まりまして、今回のA部門「教科指導、学校経営部門」には、小学校117編、中学校78編、合計195編という多数の論文が応募されております。

今回の課題は「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。これは小学校、中学校をつうじまして非常に大切な、基本となる課題でございまして、私どもは、創意工夫を生かした実践が具体的に記述された論文が集まることを期待したわけでございます。

審査の基準としては、次ぎの3点があげられます。

- (1) 実践の結果に基づいて子どもの姿が具体的に記述され論じられているか。(実践性)
- (2) 実践のなかにどのような創意工夫が見られるか。(創意性)
- (3) 特殊な実践ではなく、だれにでも応用できるような一般化への手がかりがあるか。また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分なされているか。(一般性)

その他、論文としての体裁が整っているか、応募規定に従っているかなどの点を、慎重に審査させていただきました。

今回の応募論文でも、新しい教育課程の完全実施を直前にいたしまして、いち早く新しい教育課程の内容を実践している報告が数多くございました。とく「総合的な学習」の実践が著しく増え、小学校で応募論文の3分の

1、中学校でも2割に当たっておりますことは、さきほど報告のあったとおりでございます。各地の先生方が熱意をもって新しい試みに挑戦されていることがわかります。論文を拝読いたしまして、先生方の日常の学習指導に対するご熱心さと情熱に打たれ、いかにご苦労が多いかが察せられると同時に、優劣のつけ難い力作を審査することのむずかしさを痛感いたしました。

それらの中から審査の結果、A部門小学校の部で最優秀賞1編、優秀賞3編、奨励賞4編の計8編を、中学校の部で、最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞4編の計8編を選定いたしました。

中学校の部であります、最優秀賞は東京都羽村市立羽村第一中学校の水野美鈴先生の「言葉に関する発表会の指導 3年間の指導のまとめとして」であります。

これは、音声言語表現の習得を目標としながら、言葉の魅力、働き、不思議さなど言語の多義性、多様性に気づかせる学習ですが、中学校での国語の学習のまとめとして、生徒が研究発表をする。そこに至るまでの3年間にわたる指導の計画性に優れ、指導の積み上げの堅実さ、発表スキルや資料の使い方など創意工夫がみられ、テーマの着眼点も今日的であり、総じてこれからの国語教育の方向性を示しているすばらしい実践であります。いわゆる「生きる力」というものの内容は、いまひとつ実態がはっきりしないきらいがある概念ですが、こうした実践にふれますと、これから求められる力を育むうえでの一つの示唆に富むものと言えます。

優秀賞は2編ございまして、一つは愛知県碧南市の教育委員会にお勤めの金子てる子先生の「平和を考え、主体的に行動する生徒を

育む公民学習 21世紀へ語り継ぐ地域の戦争体験」でございます。これは中3の生徒が公民分野の学習活動として、学区内のお年寄りの戦争体験談を収集して、それをワープロで本にしていくという実践です。

金子先生は授業のなかで、戦争体験者が高齢化し、地域の人々の記憶もうすれていく状況に着目され、まだ可能なうちに、生徒の力で体験談や資料を集めて、3年生全員が編集に参加して「21世紀への贈り物」と題して出版させたものです。戦争とか平和のテーマを正面から取り上げることはなかなかむずかしいことですが、この場合は、聞き取りや資料の収集がきちんと進められているだけでなく、かつての世代の労苦をしのぶ一人一人の生徒の思いが深められていく過程が大変すばらしいものです。先生自身がいておられるような「バランスのとれた平和教育」という目標が達成されていると思います。

2つめの優秀賞は、長野県下高井技術家庭科研究会の村松浩幸先生を代表執筆とする「生徒たちのプロジェクトX チーム学習で取り組んだロボコン」であります。

これは、技術科のなかでチームを組み、ロボット製作を行い、ロボットコンテストにとりくんだ実践です。

技術教育で、技術開発の疑似体験というのは現今、産業界でも行なわれている開発組織で、そうした手法を授業に取り入れられたという勇気は見事なものです。この実践のチーム学習は従来の合同学習と異なり、一人一人の役割分担の責任体制でありまして、ロボットの完成はその結果であります。試行錯誤の連続ですが、輝きにみちた失敗といえる過程です。具体的な目標設定、適切な動機づけや支援があれば、やりとげる力を生徒は持っていることを示したすぐれた実践であります。

以上が、A部門 教科指導、学校経営部門 で最優秀、優秀賞を得られた実践論文でございます。

いずれの論文を拝見いたしましても、現場の先生方一人一人が、今の子どもたちに、しっかりとした基礎・基本の学力を身につけさせることにはいかにご苦心なさっているか、実践がどれほどご苦労であるかということが痛感させられます。また、それに加えて、改革を求められている学校教育のなかで、なんとかいろいろと新しい創意工夫をしていただいているかということです。このことがどの論文にも、はっきりと読み取ることができまして、それが大きな成果ではないかと感じた次第でございます。

(奥田眞丈)

〔B部門〕

受賞された先生方、おめでとうございます。たいへん優れた実践論文をお寄せ頂きまして、御礼申し上げます。

B部門は、これまで「コンピュータ活用部門」と称していたのですが、今回から「情報通信メディア活用部門」として応募をいただいております。

今世界の主要国の国策としてICTとかITによる教育改革ということが言われております。ICTは情報通信技術、ITは情報技術ということですが、ここ1年の間に日本でもIT教育に関しましてたいへん大きな動きがございます。まず「Eジャパン戦略」というのが、ちょうど1年前に出てきまして、いま「Eジャパン重点計画」というプログラムが出来ます。その中で、教育の情報化また情報技術を教育に活用しようとか、ICTに関して理解を持つ、あるいは使いこなせる人材を育成しようということに焦点がいております。去年の3月くらいには学校へのインターネットの接続が80%越しておりますし、ミレニアム計画が順調に進むと今年度で全部の学校にインターネットが入るということになっています。今年は新たに文部科学省のほうでは、IT教育の深化定着プログラムということに力を入れようとしています

さて、いよいよ本年度から新しい教育課程の完全実施ということになり、とくに総合的学習の時間でインターネットや情報機器の活躍する場がたいへん増えてくるのではないかと、もうひとつ中学校の技術科で情報教育が必修になる、こういうことによってこの部門の重要性がますます出てくる。情報技術を使いこなすことによって「生きる力」をよりよく育てることができるのではないかと考えているわけです。そういう状況を反映しまして、昨年と応募数は変わらないのですが、その中身が若干変わってきています。中学校の応募が減って小学校が増えたのですが、小学校では

総合的学習が増えて、中学校では減ってはいませんが情報が増えています。こうしたところに現在の状況を反映いたしているように思えます。

B部門の審査基準としましては、A部門のそれに加えまして、ITの技術が有効に活用されているかどうかに着目しております。勿論子どもの姿がよく描かれているかという点は重要視されます。審査の結果、最優秀賞1編、優秀賞として小中から各1編、奨励賞を3編選定いたしました。

中学校では優秀賞として、岐阜大学教育学部附属中学校の渡部進武先生の「生徒指導におけるITを活用した情報共有と共通認識を深める実践」が選ばれました。生徒指導に関する情報を全職員で共有しようというねらいで、HPとか、メーリングリスト、プレテンボードとかいろんなものを使って全職員に伝えるというものです。生徒指導の心構えなんかも掲示板にのせる。掲示板では学校のようにも絶えず知らせる。メーリングリストで生徒指導便りも出す。保護者にも行きますからどんどんメールもくる。こうして常に生徒指導の情報が全職員に届く。情報の量も多いですが、全職員とのコミュニケーションが大変であることがわかります。ただ、論文のなかに、もう少し子どもが変わっていくような姿が入ってくると、さらに良かったのではないかと思われました。

B部門全般に言えるのですが、なにをしたかと同時に、教師の働きかけ、それに応じて生徒がどう変わっていったか、その姿が見える論文が欲しいです。それから論文の分量が多いものがある。図版や表を入れ過ぎているのはやはり困ります。

かつてコンピュータを、個別の教科の成績を上げる目的で位置づけるCIという使い方が多かったのですが、しだいに今回のように多様な活用のしかたが出てくるようになってきています。表現、コミュニケーション、評

価反省のツールなどバラエティーに富んだ使い方が増えてきたことは喜ばしいことです。

たまたま今回の最優秀賞3編はいずれも国語の分野での実践です。国語という文化の基盤となる教科であり、今日ではコミュニケーションを重視する国語教育ですが、グローバル化時代で世界に対するコミュニケーションがいわれますが、その基はやはり日本語でのコミュニケーションがきちんとできなくてはならないでしょう。その上で外国との交流があり、音声や映像とかも加えたコミュニケーションが育っていく。今回そういうシンボリックな感じを受けました。

(坂元 昂)

各審査委員の講評，所感

(高桑康雄)

今回、最優秀賞の3点の論文全てが国語の実践であったことは、なにか象徴的な出来事のように思います。学校教育が生涯学習の基礎と考えられてきておりますが、いずれの実践もまさにそのところに焦点を当てて、国語の指導をされていて、それが最優秀賞に選ばれた所以であろうと思います。吉田先生の実践も、義務教育の最終段階で、ことばについての基本を抑えなおそうということで指導なされたものです。もうひとつ印象的なことは、総合的学習が多くあげられたのですが、総合にとどまらず、学校と地域とをどう結び付けていくかという問題が考えられていることです。学校を中心として横の広がりとし、それからさきほどの生涯学習という時間的なつながりとの接点を視点において実践されていることが素晴らしい点だと感じました。

(多湖 輝)

私もかつて大学の附属の校長をしておりまして、現場の先生方がいかに忙しいか、またその中で研究をすることがいかに大変であるかはよく承知しております。いずれの実践研

究もほんとうによくやられていると感心いたしました。

学校教育というのは何を、どこまでやったらいいのか、今日そのところが分からなくなってきました。今回国語の実践論文にたいへん優れたものがあつたわけですが、いまだき街で使われている言葉を聞くと、若者言葉なんか凄い言葉がとびかかっていまして、国語教育云々の次元ではありません。異文化とってよいほどで、通じません。ごくふつうにも「～のほう」「～とか」がやたらに入るような言葉が公的な場でも聞かれる。いったい日本語の美しさをどうやって守っていくのか。文字にしましても、今は携帯電話では絵文字が若者どうしの間で通用している。こういうものを学校で先生がどう指導すればよいのか、分かりません。メーカー側は面白くて売れるようなものを次々に工夫してきますから。世の中に溢れるこの影響力と、学校教育で果たせる役割とのバランスでは、社会の影響力のほうがどんどん大きくなっていくのが現状です。モバイルなどが発達してくると人間の精神構造までが変わってきます。こうした情況、傾向にどう対処するのか。

同時多発テロ事件以後、世界は変わったといわれています。たしかに変わってきていますが、しかしいったいあの事件を、学校で生徒にどう教えたらよいのか、とても自信をもって教えられません。あの問題には民族問題、宗教問題、イスラエル問題そして貧困の問題が大きくかかわっています。それらについて過去の歴史をふまえて、適切な判断を加えて教えることができるか、あるいは、いろいろな情報、背後の事情をただ話していくのか、どちらなのかということです。今日の問題は全て複雑多岐なもので、単純には解釈できません。スパッと解釈するほうが学生には分かり易くて、人気も出るでしょうが。

社会の変化というのは、学校教育をはるかにしのぐ勢いで影響を及ぼします。例えば、

カラオケが普及すると、明治いらい何十年とやってきた学校での歌唱指導なんか比べ物にならないくらいのスピードで日本人の歌唱力を向上させました。学校ではなにを基本として教えていったらいいのか、よく考えなくてはならなくなっています。

アメリカではいま、1週間に2つのペースで刑務所を作らなければならないほど、犯罪人口が増えていくといわれています。20人に1人が犯罪者になるという状況です。また、離婚率も50%、北欧はもっと高い。日本は2%程度です。犯罪が増える、いっぽうで家庭がなくなる。学校教育の中にそういう問題がどんどん持ち込まれてくる。そういう状況のなかで我々は無力感に囚われているだけなのか、というのが今日の課題です。

今は学校の中だけでどうにかなるような事態ではないのです。先生方も声を出して外へ訴えないとだめです。世論が高まってきて、何とかしなくてはということになると、日本はまだまだ捨てたものではない。教育問題もこれからが大変だと思いますが、どうか今後もご研鑽にはげんでいただきたいと思います。

(寺崎昌男)

今回の実践論文を読ませていただいて考えることが4つほどございます。

ひとつは、実践の持続性が大事であるということです。最優秀賞の2点とも2年、3年にわたる計画と実践です。地味ではあっても、やはり積み重ねの重要性を改めて感じました。

2つめは学力低下の問題と、今回の教育賞のテーマである「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」ということとの関係であります。今の学力低下論にはかなり一面的なとらえ方がなされているところがあります。大学それも理数系での基礎学力の低下が強調されているという特性があります。しかし、OECDの調査などでは、読解力で日本の生徒はトップレベルでして、他にも落ちていない能力はい

くつもあります。はっきり落ちるのは学習意欲です。これは意欲を発揮できるような条件を子どもたちに用意してあげていないということと言えます。勿論、大学生の一般的なレベルは落ちていると思います。それには少子化の影響でこれまでは大学に入ってこなかった学生が入ってくるようになったことも否定出来ません。それはともかく、子どもたちの学習意欲をどう掘り起こしたらよいか、そのことがこのテーマになっているといえます。

3つめは「教育実践に企業秘密はない」ということです。先生方の実践を拝見しますと、個性的な教育実践をいかにしてつくるかという競争こそ大いにやるべきであるという思いを強くいたしました。身分とか地位、過去の実績、論文の数といったものの競争に巻き込まれますと、教育は枯れてしまいます。先生方の実践は、モデルとして全国に広めるべきでして、どんなにモデルが広まり、まねされようと、結果が同じということはありません。実践の共有こそ大事なことであり、その上でこの東書教育賞が役に立つならば嬉しいことです。

最後は、入賞された方々にではありませんが、全体的に応募論文の文章力がおちてきているという苦言を呈したいと思います。教育実践の論文には、沢山の資料や材料、解説よりも、子どもの反応、生きた姿、息づかいのようなものが描かれてほしいのです。実践記録はひとつの文学だと私は思っているのですが、そういう文学性をもっと出てくれればよいと願っております。

(三上祐三)

小学校の部について感想を申し上げます。いずれも新しい教育課程の実施を目前にひかえて、その趣旨を生かしたすぐれた実践でした。

掛川先生の「読書マラソンのすすめ」は読書の楽しさを味わわせたい、読書の習慣をつ

けさせたいという願いから出たものです。全国の学校では、子どもの本ばなれということに対して、読書運動がさかに行なわれています。朝の15分の読書時間とかさかんです。掛川先生の実践の優れている点は、保護者の方々を巻き込んで読書マラソンを展開されたということです。おそらく子どもたちは家に帰ってからの親子の対話が豊かになっていることと思います。そういうことが生きる力につながっていくものだと思います。

山田先生ほかの「ゴミ減量作戦を広めよう」は、社会科の授業から出発して総合的学習に発展させた実践ですが、子どもが主体になって活動していく、そのプロセスを先生がうまく指導援助されていくようすがよく分かりました。また、市役所まで動かしたというダイナミックなものでして、4年生でここまでよくできるものだと驚いた次第です。子どもたちには大きな自信がついたことでしょう。

また元木先生と徳水先生の実践は、それぞれ地域の環境に着目されて、そこから問題を見つけ出し、追求されていく。総合的学習として両者には方法的な違いがあり、いずれも学習のモデルとして立派なものでして他の模範となるものと言えます。

奨励賞の中に学校経営に関するものがございました。山木先生の「夢育の学舎」ですが、五日制のもとでの学校作りにおいて、地域での子どもの時間、空間をどう充実させていくかは大きな課題ですが、その点でコミュニティスクールを指向した実践であり、多くの学校で参考になるものと思います。

いずれも新しい教育課程に向けて、積極的に取り組んでおられることがよく分かり、心強く思いました。

(赤堀侃司)

B部門は、ある面でむずかしい部門でして、最近のようにインターネットとか情報機器が増えれば増えるほど、ウィルスなどのさまざ

まの問題が出てきます。学校で情報メディアを使うということになると情報モラルをどうやって守らせるかということが大きな問題になってきます。先般もある研究会に行きましたら、著作権の問題から始まってプライバシーの問題、ウィルス対策等々の話ばかりでした、こういうことを話していくと人を見たら泥棒と思えみたいなことになります。いっぽうでは、思いやりを育てるとか言っているのですから、なにか矛盾しています。

しかし、情報には裏と表というか光と影の部分がありまして、それをなくすわけにはいかないのです。矛盾があっても、それを越えていかななくてはならないのが現代社会です。情報社会に背を向けて生きていくことはできないのです。そこで情報社会に生きていく力を育てていかななくてはならないことになります。やりかた次第で学校でもそれは十分に出来るのではないかと思います。そういう点で、今回の岐阜大学附属中学校の実践には興味がありました。

今の中学生の中には信じられないほど問題を抱えている子がいます。その場合、彼らと、また彼らどうしのコミュニケーションをどうやって成立させていくかが大事です。その一つの道具にコンピュータがなりうるということが分かりました。一例ですが、私の関係してます教育センターで、不登校の生徒をなくそうということで改善の仕事をしています。そこで成果があがりまして、生徒が学校に通うようになった。なぜかといいますと、簡単でして、電子メールで交流させるようにしたら効果があったのです。不登校の生徒達に聞きますと、彼らは人と話し合うことが一番得意、いやなことだという。それはそうでした、人と話し合いできたら学校に行っていたでしょうから。そういう彼らとして一番楽なコミュニケーション手段は電子メールだったのです。キーボードメディアはいろんな使い方があって、どうしたらうまく生活の中で役立てられ

るか、それを生徒指導というところで考えて、実践していったのが、今回のものです。ウェブにいろいろな素材をのせている。それを家で見ている。そういうことがあって親とのコミュニケーション手段となっていく。ITのいろんな活用方法を生徒指導というところで使ってみようという発想がおもしろいと思いました。解決の難しい矛盾のなかで、いろいろな可能性を求めた実践がどんどん生まれてくるようになると嬉しいことです。

(堀口秀嗣)

今回のB部門の入選論文のいくつかに共通するものとしてデジタルポートフォリオがあります。これは新しい流れでして、とくに長期にわたる活動を記録して、先生や生徒が、評価や振り返り学習に活用するとかするのですが、これをデジタル化することの有効性が分かってきて、今後ますます増えることと思われまます。総合的学習だけでなく、教科の学習においても長期にわたって取り組む場合とか、他教科と関連性を持たせていくような場合にたいへん効果があります。

デジタル化によってたんに記録を残すだけでなく、取り込んだ情報をさらに多方面に活用できるという利点があります。例えば、ポケットファイルでつくっていたポートフォリオは、沢山の内容を集めていても、ただ見るだけになってしまうことが多い。デジタルの場合はワープロにおとしてみとめを作っていくとか、外部の人に伝えとか、多様な使い方ができます。送信の簡便さがこれからの学習に役立つと思われまます。

もうひとつ感じましたことは、岐阜大学附属中学校での実践ですが、情報の共有を目指したという点です。学校の内部情報を外に発信するということは、たいへんこわいことです。どんな人にどう見られるか分からない。批判にさらされることもあるわけですが、この場合それを適切に、保護者だけに見れる方

法を活用することによって、これまで学校の壁の中で行なわれていて、見えなかった活動が、外の関係者に見える。それを可能にしたのがデジタル、ICTの手段であって、そういう利用に踏み込んだ実践は今後の参考になると思います。

それから、多様な表現力、パワーアップです。いままで頭脳でやっていた活動をICTの活用によってより強固に、強力でやることが可能である。そういう面での利用が見られました。評価の面でもたいへん工夫された取り組みがあります。チェックリストや自己評価、相互評価で得られた情報を、整理して作っていくことは大事なことです。

最後に、さきほど「教育実践に企業秘密はない」と寺崎先生がおっしゃいましたが、私もそのとおりだと、我が意を得た思いがいたしました。今回も入賞論文は冊子で公刊されることになりましたが、ぜひ多くの人に見ただいて、また他の先生の実践についての考えを出し合って、さらに深めていくように役立つことを願っております。

(高木清文)

平成14年度を目前にした今、各学校は学校週五日制の下での教育課程の編成に英知を傾けられていることでしょう。そのような中で、保護者も含め各学校を概観しますと、ある種の戸惑いを感じているのではないのでしょうか。それは端的に申し上げまして、いわゆる「学力低下」への懸念という形で取り沙汰されている風評に対する戸惑いではなかるうかと思われまます。

4月から全面実施となる新学習指導要領で、その実現を目指す学力は現行の学習指導要領においてとらえられた「新しい学力観」の継続・発展を通して培われるものであり、「生きる力」に収斂されていると思われまます。このように考えまますと、2年間の移行措置期間を終え、いよいよこれから実施という段階にお

いて、風評に右往左往することはいかなものかと思ます。

今回、東書教育賞の論文審査にかかわった率直な感想は、いずれの論文にも巷間に飛び交う風評などに惑わされることのない、日々の教育実践に裏づけられた揺るぎない自信が感じられたということです。特に、A部門において入賞された中学校8編の論文は、切り口は各々に異なるものの、新学習指導要領が目指す学力の中心をなす「生きる力」とは何かという視点がおさえられ、目の前の子どもたちに確かな学力を培うという教師の願いを論述の随所に読み取ることができます。

「学力低下」論をはじめとする様々な風評の一つの弱点は直接、義務教育段階の子どもたちの教育に携わっていないところからの論が多いということです。いっぽう全国から東書教育賞に応募された先生方は、まさに日々子どもたちに関わり、様々な創意工夫を重ねている実践者であるわけです。このことは、いかなるものにも動じることのない教育実践者のみが有する強みであると同時に、教育実践者としての自覚と責任の基盤でもあります。

以上の点を踏まえまして、全国の数多くの教育実践者である先生方に、日々取り組まれている貴重な実践をいろいろな機会をとらえて外に向けて発信していただきたいと願っています。学校や先生方への信頼は、そのような積み重ねによって確立していくものと信じています。

終わりに、各受賞者及び応募された多くの先生方に心からエールを送りたい気持ちでいっぱいです。

(杉山 茂)

今年も、全体に優れた作品が多くありました。とくに嬉しかったのは、奨励賞の一つに算数が選ばれたことです。数学教育に携わる者として、これまでも期待していたのですが、纏め方がまずく、ここしばらく算数・数学は賞を受けていなかったからです。それは中身はあっても、その良さが伝わらない論文、いい成果があげられているであろうということも分かって、具体的にどうしたら良いのかがよく分からない論文だったからだと思ます。

最優秀賞、優秀賞に選ばれた論文は、独創的なアイデアを持った実践であるとともに、その良さが感動とともに伝わってくるようなものであり、同じ実践をしようとすればどうしたらよいかの具体性も持っている論文であるといえます。全体に、長い時間をかけての実践を綴った論文も多く、その努力の姿に頭の下がる思いがいたしました。教育についていろいろな苦情が呈せられますが、これらの実践の論文をぜひ見てほしいし、このような実践が多くの人々に受け継がれていくことを期待いたします。教育賞の価値は、そうすることをおして教育の質を上げることにもあると改めて思った次第です。

